

50の質問で読み解く18世紀イギリス小説(1)

藤田佳也*

Reading 18th Century English Novels with 50 Questions

Yoshiya FUJITA*
(Accepted 6 December 2017)

はじめに：1. 英文学を学ぶことの意義はなにか？

ほとんどの英語圏文学の研究者が英語の教師でもあるという現在の日本の状況において、ジツヨウテキナエイゴという逆風が吹き荒れ続けるなか、英語教育における英文学の意義、あるいは英文学者の英語教育における役割、さらには文学を学ぶこと自体の意義などについて、学会や研究会などで議論されることが多くなった。英語圏文学、英語学、英語教育学に関わる日本最大の学会である日本英文学会においても、文学教育の意義に関わるシンポジウムが繰り返し開かれていることから、その逆風の強さがうかがえる。

文学テキストが、「気づきの経験」とそれに続く「考えるという行為の実践」を学生たちにうながす教材として、極めて有効な可能性をもっていることは間違いない。そしてそれは、英語という言語に対して興味を抱かせる一つの非常に重要なきっかけともなりうる。その際、重要となるのが、テキスト読解の過程の「どこで」「どのような」質問を提示するかという点であり、私たち英文学の教員に求められることは、時代の点でも場所の点でも大きく距離をおいて存在している文学テキストを、それらの質問によって学生たちの存在する「今、ここ」と結びつけていくということであろう。教員側の適切な質問提示によってこの結びつけが成功したとき、教室において学生たちが文学をリアルなものとして具体的に「体験」し、現在の自分の枠組みを越えていくことへとつながっていく。そのような文学体験において、学生たち自身が主体的に文学テキストに対して何らかの疑問を抱き、それについて考え、そしてある答えにたどり着くというのが理想だが、おそらく、最初の段階では疑問すら抱けないというのが実際であ

ろう。高校までの段階で系統的な言語教育というものが行われていない日本では、当然といえば当然のことといえる(三森 2003)。

本稿においては、イギリス小説を学ぶ際に教室で使用されることが多いと思われる、川口喬一『イギリス小説入門』(研究社)をテキストに、学生たちに文学を具体的に体験させるうえで、どのように学生たちに問いかけながら講義を進めていくか、その一つの実例を示したい。『イギリス小説入門』は、各作品からの抜粋が的確である点において、作品を具体的に体験するうえで非常に優れているが、学生たちには、原文の抜粋部分を含め、理解できないところは飛ばして構わないので、とりあえず全体に目を通すように初回の講義において指示をだしておく。

2. 小説というジャンルのもっとも重要な特徴はなにか？

初回の講義はオリエンテーションということで、イギリスの近代小説が始まった18世紀の主な小説家と作品に焦点を合わせることを説明し、Daniel Defoe, Jonathan Swift, Samuel Richardson, Henry Fielding, Laurence Sternといった小説家たちとその作品 *Robinson Crusoe*, *Gulliver's Travels*, *Pamela*, *Tom Jones*, *Tristram Shandy* をあげておく。また講義においては、その他のさまざまな時代、さまざまな国の小説にも触れること、小説に関する「知識」を身につけるというよりも、読み方、つまり「方法」を身につけることが目標であると説明する。

まずは、小説というジャンルのもっとも重要な特徴はなにか、ということについて学生たちと考えてみる。シェイクスピアの『ハムレット』とチャールズ・ラムの『ハムレット物語』所収の「ハムレット」を比較しながら、小説の場合、物語と読者の間に「語

* 農食環境学群循環農学類英語圏文化研究室
English-Speaking Culture, Department of Sustainable Agriculture, College of Agriculture, Food and Environment Sciences

り手」という存在がいて、ある種のフィルターとなって物語にある色をつけていくこと、つまり、語り手・語り方が違えば語られる内容は異なることになり、小説においては語り手・語り方に注目する必要があることを、学生たちにまずは実感させたい。

コナン・ドイルのシャーロック・ホームズのシリーズなども、具体例としてわかりやすいだろう。ホームズのシリーズにおいて、物語は主に助手であるワトソンの視点から提示される。圧倒的な推理力をもつホームズは、依頼を受けたかなり早い段階、時には依頼を受ける前に、犯人像にたどりついていることもある。もしこの物語がホームズの視点から語られてしまったなら、犯人探しという推理小説にとってもっとも重要な過程が失われてしまうことになるだろう。答えの提示を遅らせるとするならば、何か不自然な設定を設けざるをえなくなる。

だからこそ、ワトソンが語りの視点として用意されている。ワトソンが医者という設定になっていることは重要である。医者という職業柄、事実を客観的に観察し読者に伝えることはできる。しかし、ホームズのような推理力を持たないため、答えまでは提示できない。そのため、ホームズと同じ情報を読者は手に入れることができ、犯人探しに参加できることになる。語り手の役割の重要さが実感できる例であろう。

また実生活においても、わたしたちは話し手によってその言葉の受けとり方を変えているということを実例としてあげると、学生たちにも語り手の重要さが実感しやすい。「はじめに」でも述べたように、講義においては、18世紀イギリス小説という時間的にも空間的にも隔たった、いわば異物である英文学を、学生たちのいる「今、ここ」と結びつけることを常に意識するように心がける。学生たちが英文学をリアルなものとして具体的に体験しているという実感をもたせることが、一つの重要な目標である。

3. 小説が成立するにはなにが必要か？

イギリスにおいて近代小説が成立した18世紀あるいはその直前の出来事として、フランシス・ベーコン、アイザック・ニュートン、ジョン・ロックらにより近代自然科学が成立したこと、国王ではなく議会在が統治する立憲君主制が定着したこと、市民階級の台頭によってジャーナリズムが誕生したこと、などをあげる。さらに、こういった事実を重視する方向性は、当時の風景画と静物画にも現れていること、エッセイ、気質物、伝記、歴史書、日記といっ

た17世紀の散文も18世紀の小説へとつながっていったことについても簡単にふれておく。

18世紀に小説が成立した背景には、経済的な要因もあった。John Gayの*The Beggar's Opera*やHenry Fieldingの*The Tragedy of Tragedies*などが代表であるが、当時の劇作家たちは、ウォルポール首相を代表とする当時の政治家たちの腐敗した政治や私生活に批判的な劇を書いた。それに対してウォルポール首相は、1737年、芝居を検閲する法律であるThe Theatrical Licensing Act of 21 June 1737を制定する。これにより自分の書きたい芝居が書けなくなった劇作家たちは経済的な困難に陥り、小説家へと転身せざるをえなくなった。フィールディングがその代表である。

また、非常に大きな要因として、この時期に「読者」という存在が誕生したということがあげられる。ピューリタン革命による中産階級の台頭により、庶民階級に経済的余裕が生まれた。また、ピューリタンを中心とするプロテスタントたちは、日曜学校などで一般民衆に読み書きを教えたため、識字率が急激に上昇した。カトリックは教会で神父から教えを授かるという形を重視したのに対して、プロテスタントは個人が聖書を自らの力で読み、自ら神の教えを聴きとることを重視していた。このような中産階級の経済的余裕と識字率の上昇が庶民階級の読者を増加させ、そしてそれが近代小説の成立をうながす一つの力となったといえる。

漠然と、文学というものは社会の動きとは関係をもっていないと学生たちは考えていると思われるが、さまざまな外的な要因が文学あるいは芸術に大きな影響力をもつことを確認したい。

4. 英語と日本語、どこが違う？

講義で最初にあつかう小説は、イギリス近代小説のはしりといえる、デフォーの『ロビンソン・クルーソー』である。『ロビンソン・クルーソー』は、無人島で生活したスコットランドの航海長Alexander Selkirkの実話をもとにしている。1704年10月、航海長であるセルカークは船長との争いが原因でチリの沖合にあるマス・ア・ティエラ島にとり残される。セルカークは4年4ヶ月の間、この島で自給自足生活をし、1709年2月にウッズ・ロジャーズに救出される。ロジャーズは自らの航海においてセルカークの体験談を紹介。ロンドンのジャーナリストであるリチャード・スティールがそれを1713年に新聞でとりあげる。ダニエル・デフォーは、この記事を元にロビンソン・クルーソーの物語として1719年に

初版を出版した。初版本ではダニエル・デフォーという著者名は記されておらず、ロビンソン・クルーソー自身の航海記であるかのような形式をとっていた。ちなみに、セルカークの住居跡を発見したのは、日本人探検家の高橋大輔である。

川口喬一の『イギリス小説入門』では、クルーソーが無人島に漂着してから15年ほどたったある日、砂浜に人間の足跡を一つ発見する場面がとりあげられている。足跡がたった一つしか残っていない点については、ジョン・サザーランドの『ジェイン・エアは幸せになれるか?』の第1章「なぜ『足跡が一つだけ』なのか?」で詳しくとりあげられているが(サザーランド 1998)、川口の言葉を借りると、「鮮明に残された一個の足跡は、救済のための情報としてではなく、隔絶した世界への外部からの新しい脅威の侵入として激烈な効果を与える。」(川口 1989: 20)。

常識的に考えると、自分以外の人間の痕跡を見つければ、救済の可能性に喜ぶべきところではあるのだが、このクルーソーの反応からわかるのは、彼が15年の間にたった一人で、他の人間を必要としない完璧なシステムを作りあげているということであろう。だからこそ、足跡の主は救済者ではなく侵略者であると認識されるのである。

It happen'd one day about noon going towards my boat. I was exceedingly surpriz'd with the print of a man's naked foot on the shore, which was very plain to be seen in the sand. I stood like one thunder-struck, or as if I had seen an apparition; I listen'd, I look'd round me, I could hear nothing, nor see anything; I went up to a rising ground to look farther; I went up the shore and down the shore, but it was all one, I could see no other impression but that one. I went to it again to see if there were any more, and to observe if it might not be my fancy; but there was no room for that, for there was exactly the very print of a foot, toes, heel, and every part of a foot; how it came thither I knew not, nor could in the least imagine. But after innumerable fluttering thoughts, like a man perfectly confus'd and out of myself, I came home to my fortification, not feeling, as we say, the ground I went on, but terrify'd to the last degree, looking behind me at every two or three steps, mistaking every bush and tree, and

fancying every stump at a distance to be a man; nor is it possible to describe how many various shapes affrighted imagination represented things to me in, how many wild ideas were found every moment in my fancy, and what strange unaccountable whimsies came into my thoughts by the way.

When I came to my castle, for so I think I call'd it ever after this, I fled into it like one pursued; whether I went over by the ladder as first contriv'd, or went in at the hole in the rock which I call'd a door, I cannot remember; no, nor could I remember the next morning, for never frighted hare fled to cover, or fox to earth, with more terror of mind than I to this retreat.

I slept none that night; the farther I was from the occasion of my fright, the greater my apprehensions were, which is something contrary to the nature of such things, and especially to the usual practice of all creatures in fear: but I was so embarrass'd with my own frightful ideas of the thing, that I form'd nothing but dismal imaginations to my self, even tho' I was now a great way off of it.

(川口 1989: 20-21)

まずここでは、英語と日本語の違いについて原文と翻訳の比較から考察すべく、岩波文庫の平井正徳訳の当該箇所を示し、学生たちと考えることにする。

冒頭の“*It happen'd*”は、まず何かが起こったことだけを読者に伝え、その内容の提示を引き延ばす。これは読者を一種のサスペンスの状態におくことで、作品に読者を引き込み、積極的に作品に関わらせる効果をもっているといえるだろう。『ロビンソン・クルーソー』はまだ小説とはいえないとの見解が聞こえてくることもあるが、このような一見、何気ない表現からも、この小説は非常に読者を意識して書かれており、その点で間違いなく小説となっているといえる。

また通常、英語において時間の指定は細かいほうから示されるが、“one day about noon going towards my boat”においては、提示の仕方が逆になっている。これもまた、情報を小出しにすることで、読者の読書行為を先へとうながすことへとつながっている。読者という存在が強く意識されていることが、ここからもわかる。

このような例を通して、英語と日本語の語順の違いといったものについて、具体的に学生たちに考えさせることができる。言語の種類が違えば表現方法も違ってくるといふこと、つまり、言語の数だけさまざまな表現方法があることを、実感をもって学生たちに理解させたい。

次に “I was exceedingly surpriz’d with the print of a man’s naked foot on the shore, which was very plain to be seen in the sand” というセンテンスについて考えてみる。平井正穂訳では「私は海岸に人間の裸の足跡をみつけてまったく愕然とした。砂の上に紛れもない足跡が一つはっきりと残されているではないか」となっている。原文では “was exceedingly surprised” という述部の後に、クルーソーがなにに愕然としたのかが示されているが、訳では「人間の裸足の足跡」が出て来てから、「まったく愕然とした」と述部が現れている。訳は説明の文章となってしまうが、原文の方は「一体、なにに驚いたのだらう」という疑問を読者に抱かせ、読者を物語に引き込む力をもっていることが学生たちにもわかるだろう。

また、“on the shore”, “in the sand” には情報の重複がみられる。一見、同じことが2回繰り返されているように思えるが、“shore” と “sand”, そして “on” と “in” の対比に注目すると、ここに時間の経過と空間の移動が読みとれることがわかる。遠くから見ていると「浜辺」であるものが、近づいて見ると「砂」になる。そして浜辺の「上」に見えていた足跡が、近づいて見ると砂の「中に」くっきりと刻まれている。これを加味して訳すとすると、「私は非常に驚いた。というのも人間の裸足の足跡があったからだ。近づいてじっくりと見てみると、その足跡は砂の上にくっきりと残っているのがわかった」ぐらいになるだろうか。

「神は細部に宿る」という言葉どおり、細かな部分にこそ重要なことが隠れている、ということを学生たちに理解させたい。

5. 省略されたり、繰り返されるのはどうしてか？

“I listen’d, I look’d round me, I could hear nothing, nor see anything.” についてはまず、“listen” と “hear”, そして “look” と “see” の違いを学生たちには理解させたい。クルーソーは耳をすませ、辺りをうかがうが、どんな情報も彼の耳に入って来ることはなく、また目に入って来ることもない。学生たちはいずれも同じように「見る」「聞く」と訳していることが多いと思われるが、“listen”, “look” が表す

能動性と、「耳に入る、聞こえる」「目に入る、見える」という日本語がしっくりくる、“hear”, “see” の受動性について、具体的に理解できる好例である。

ここで学生たちに質問。通常の英語の書き方から逸脱している箇所はどこか。4つのセンテンスが接続詞を用いられることなく、コンマで区切られていることに気づく学生も多いだろう。通常であれば、少なくとも “I could hear nothing” の前には接続詞 “but” が置かれるはずであるが、接続詞の省略によって読者の緊張が持続されることになるのがわかるだろう。ここでもまた、読者が強く意識されている。

また、主語 “I” が3回も繰り返されているが、これは、クルーソーという主体の分裂、つまり彼が狼狽し、慌てふためいている様子を表しているといえる。突然の出来事に冷静さを失っているクルーソーの姿がここにある。

しかし、クルーソーはすぐに冷静さを取り戻す。彼はまず高いところに登り、足跡の主がいないのを確かめる。その後、浜辺をくまなく調べたうえで、再び足跡の所へと戻り、他の足跡がないかを調べている。さらに、自分の空想ではないかということも疑ってみている。ここにあるのは、科学的、論理的、合理的な行動である。直前の狼狽ぶりから打って変わって、クルーソーがすぐに冷静さを取り戻していることがわかる。

その後クルーソーは足跡の分析にとりかかるが、“the very print of a foot, toes, heel, and every part of a foot” には、クルーソーの視線の動きと思考が再現されている。まず全体を “a foot” ととらえ、その後でより細かく足の各部分の確認を行ったうえで、足にあるべきものはすべてある、これは足の跡だ、と結論づける。この部分にも、彼の科学的、論理的、合理的な思考法が見てとれる。

6. 翻訳において消えてしまっているものはなにか？

次に “after innumerable fluttering thoughts” という表現に注目してみる。翻訳では「さんざんわけのわからないことを考えたあげく」となっている。ここで「わけのわからない」という訳語が与えられているのは、“fluttering” という表現である。

“flutter” ロングマン英英辞典で引くと“(1) (of a bird, insect with large wings, etc.) to move (the wings) quickly and lightly without flying (2) throw (person) into confusion or agitation” という記述がある。翻訳は(2)の意味にとっていると考えられる。しかしここでは、鳥や昆虫などが飛ぶことな

く翼をパタパタと動かしている状態、しっかりとどまるでもなく飛ぶのでもない、どっちつかずの状態を表す(1)の意味こそが、この“after innumerable fluttering thoughts”という表現に極めて具体的に明確なイメージを与えている。さまざまな考えが頭に浮かぶが、どうしても結論が出せず、慌てふためいている様子が表されているのである。比喩表現による内容の具体化の好例である。

もともと(2)の意味は、(1)の具体的な意味を抽象化・一般化することから生まれてきた意味である。元となっている意味を知ること、単語の意味はより具体的に理解することができ、理解できるから記憶にも残り、結果として使える知識になる、ということを生徒たちに理解させたい。特に動詞に関しては、英和辞典の感覚的な説明を見るよりも、英英辞典の明確な記述を読んだ方がずっと理解しやすい。“whine”を実例として挙げてみる。

ジーニアス英和大辞典で“whine”をひくと、「1. 〈子どもが〉哀れっぽく [ひいひい] 泣く 2. [けなして] (・・・について) ほそほそ泣きごとを言う、ぐちをこぼす [about]」と説明されている。3種類のカッコが統一感なく用いられているのも気になるところだが、「ひいひい」や「ほそほそ」といった擬音を用いた感覚的な説明は、一見わかりやすいようでいて、実際は何を表しているのかが不明確であり、どういう状況においてこの語が使われるのか、理解することは難しいといえるだろう。

一方、英英辞典では“derog to complain (too much) in an unnecessarily sad voice, usu. about something unimportant”と記述されている。まず、この動詞が軽蔑的な意味を帯びていることを最初に示したうえで、「不平を言う」と別の平易な動詞での言い換えがなされ(“complain”), それに続いて、不平の頻度(“too much”), その際の声(“in an unnecessarily sad voice”), 不平の対象(“about something unimportant”)が記述されていく。

このような英和辞典と英英辞典の記述の違いには、ひとつには、動詞の後に修飾語句が示される英語と修飾語句が示されてから動詞が示される日本語の語順の違いが根底にあるが、英英辞典の説明は、実際の使用が強く意識されていることがわかる。

“develop”など他の実例を挙げるのも効果的だろう。“develop”には「現像する」という意味がある。現像とは、フィルムに定着している画像を現像液に浸すことで浮かび上がらせることであり、“develop”には「本来そこに内在しているものを引き出す」というニュアンスがあることがわかる。デイベロッ

パーといった職業についても、その本来の役割を理解するのに役立つであろう。

訳語に変換し理解するのではなく、その語の語幹をグッとつかむ。そういった英語の単語の覚え方の有効性について、生徒たちに気づかせたい。

7. どんなことが呼び方からわかるか?

クルーソーは、自分の家を“fortification”「砦」と呼ぶ。ここにはクルーソーの外界に対する意識がみえる。たった一人で15年かけて、完璧な自足のシステム、いわば国家を作りあげてきたクルーソーにとって、外界からやってくる人間はそれを奪う可能性のある敵でしかない。ほんの1語にすぎない“fortification”という表現から、たった一人での15年におよぶ生活のなかで、クルーソーがいかなる意識をもつようになったかを、読者は明確に知ることができる。

一方、数行後にクルーソーは、自分の家を今度は“fortification”ではなく“castle”と呼ぶ。ここにはクルーソーの意識の変化がある。浜辺で足跡を見つけたという出来事がある以降そう呼ぶようになった、との説明が直後にあるが、恐れていた出来事が現実となり、敵がリアルなものとなったとき、より大規模なものを表す“castle”という呼び方へと変わったことがわかる。

ここでは、表現において“what”「何が」ではなく“how”「いかに」に注目することの重要性を生徒たちに実感させたい。

8. 「私たち」って誰?

“as we say”における“we”とは一体、誰のことか。ここではまず、この問いから始めたい。この“we”が、語り手と読者を指していることに気づく学生も多いことだろう。さらに、先述した“castle”の直後の挿入、“for so I think I call'd it ever after this”もまた、読者を想定した表現である。ここでは、“fortification”と称していた自分の家を“castle”と呼んだことで、読者が抱くであろう疑問「どうしてさっきまで“fortification”と呼んでいた自分の家のことを“castle”と呼んでいるんだろう」に対する答え、つまり「どうして自分の家のことを“castle”と呼んだのか」というと、この出来事以降、私は自分の家のことをそう呼ぶようになったと思うからなんです」が示されている。

いずれにおいても、読者が強く意識されている、あるいは、読者が小説にあらかじめ書き込まれているといえる箇所であるが、ここには“say”, “think”

と語りの現在も現れていることも重要である。読者が意識される時、語りも意識される。一見、それほど重要でない表現に思えるかもしれないが、小説というジャンルの中核をなす仕組みが垣間見える箇所であることを、学生たちと確認したい。

同様のことは、次の“no, nor could I remember the next morning”という箇所において、より明確に確認できる。どうやって家に戻ったか覚えていない、という言葉に続くこの表現において、“no”はなにに向けられたものなのか。まずは再び学生たちに問いを投げかけてみたい。この“no”は、読者の「長い時間が経ってしまったせいで、忘れてしまったのだろう」という想定される推測に対する否定である。「いや、時間が経って忘れてしまったのではないんです。だって、次の日の朝だって思い出すことができなかつたんですから」ぐらいの意味になるだろう。意味をつくる主体としての読者が意識されている箇所であり、読者との対話自体が作品に組み込まれているといってもよい。

9. デフォーってどんな人？

ここで、特にイギリスの作家を扱う際には、宗教、階級などの情報が不可欠である旨を話したうえで、デフォーおよび彼がいた時代について以下のように説明する。

ダニエル・デフォーは、宗教的には非国教会派。非国教会派とは、nonconformistあるいはEnglish dissenterと呼ばれる、イギリスで国教会に属さないプロテスタントの総称。イギリス国教会は、1534年にヘンリー8世が王妃キャサリン・オブ・アラゴンとの離婚とアン・ブーリンとの結婚を合理化するために成立させた国の宗教であり、これがイギリスの主流派となる。

ちなみに、王政復古時のロンドンの人口は50万人以上であったが、ロンドン市民の約10分の1が非国教徒であった。イングランド全体では、人口約500万人のうち約6.4パーセントが非国教徒であったとされている（塩谷 2011: 31-32）。

デフォーの父親は、獣脂ろうそく製造業者であり、デフォーはかなり低い階級に属していたことがわかる。他の文化圏においても、動物の屠殺や処理に関わる職業は、低い階級に従事していることが多い。

デフォーは、大学教育は受けていないが、6ヶ国語を話し、7ヶ国語が読めたとされる。商人、工場主、ジャーナリスト、そして政府のスパイなど、さまざまな仕事をするなかで、語学を身につけていったのだろう。スパイというのは不思議な感じがする

かもしれないが、他言語の運用能力はスパイにとって最も重要とされるものである。

彼が小説を書き始めたのは、もう60歳になろうかという頃で、彼にとって小説は、ジャーナリストとしての仕事からのほんのわずかな逸脱にすぎなかった。ちなみにデフォーは、ジャーナリストとして長短あわせ論文その他400編以上を執筆している。

彼が生まれた1660年代は、イギリスの文化、政治、歴史において重要な年代。

第1に、1660年ピューリタン革命が挫折し、フランスに亡命中のチャールズ2世が帰国、王政復古(restoration)が成立した。ピューリタン革命は、政治的には、国王を中心とする保守的な王党派とロンドンの市民を中核とする議会派との争いで、後者にピューリタンが多かったため、ピューリタン革命といわれる。階級的には、貴族・地主たちと商工業者・中産階級の人々との争いであり、宗教的には、英国国教会派と非国教会派の争いであった。

第2に、1665年ロンドンには、イギリス史上空前のペストの流行に見舞われた。死者は正式にわかっているものだけでも約7万。当時ロンドンの人口は約46万であるから、7人に1人以上が亡くなっている計算になる。この最悪の疫病の流行については、ジャーナリストとしてのデフォーの仕事である*A Journal of the Plague Year* (1722)に詳しい（『ロビンソン・クルーソー』を訳した平井正穂が『ペスト』というタイトルで翻訳）。

最後に、1666年のロンドン大火があげられる。これについては、詳細な日記を残したことで有名なサミュエル・ピープスの日記に記述がある。白田昭『ピープス氏の秘められた日記』（岩波新書）やテキストの第2章「日記を書く人たち——イーヴリンとピープス——」などを参照。こういった日記は、小説を生み出す一つの原動力となったといわれている。

こういったさまざまなコンテキストが、『ロビンソン・クルーソー』というテキストにどのように反映されているか、小説を読み進めながら学生たちに考えさせたい。

10. 『ロビンソン・クルーソー』は、どう読まれてきたか？

ここからはまず、『ロビンソン・クルーソー』の従来の読み方を整理する。

第1に、クルーソーを経済人として、具体的には、彼を資本主義・経済的個人主義の代表、新興中産階

級の代弁者としてとらえる解釈が従来なされてきた。「中くらいの身分こそ本当の幸福の基準である」(『ロビンソン・クルーソー』上:13)というクルーソーの父親の言葉などは、それを示唆するものであるといえる。

確かにクルーソーは、何かにつけて厳格に数字をあげて勘定をする。数字へのオブセッションがあるといってもいい。『A Journal of the Plague Year』においても、読者が辟易するほど、各週ごとの死亡者数が列挙されている。こういった数字へのオブセッションの背後にあるのは、経済的な次元での貸し借り勘定への強い関心である。実際、クルーソーにはあらゆる人間関係を貸し借りという観点で考える傾向がある。

ここで、経済人としてクルーソーを読んだ古典として、大塚久雄の『社会科学における人間』(1977)をあげる。

大塚は「ロビンソン的人間類型」という表現を用い、クルーソーの行動様式は合目的・合理的であり、西洋の人々の行動様式と一致しているが、これが資本主義を生み出した、とする。確かに、クルーソーの行動には非常に合理的な面があり、資本主義の社会にあるさまざまな要素が見受けられる。

たとえば、クルーソーの無人島生活において、火薬は非常に重要なものであるが、その火薬が落雷によって消失することを恐れ、クルーソーは火薬を島の何箇所かに分けて貯蔵する。これなどは、リスクを分散させるという点において、保険の概念に近いといえるだろう。

さらに、この小説で示されているデフォーの経済観を高く評価した古典としてマルクスの『資本論』(1867)をあげる。マルクスは、『資本論』の第一巻「資本の生産過程」第一篇「商品と貨幣」第一章「商品」において、「ロビンソン・クルーソーの体験談は経済学の大好きなテーマ」であると言及し、ロビンソンをホモ・エコノミクスとした。(マルクス 第1巻:138)確かにクルーソーは、物品の記録が克明であったり、生産物と労働時間の関係などを記すことに加え、自分の行動の善悪を簿記の貸方、借方の記入にならって記録する。このようなデフォーの経済観をマルクスは高く評価する。

そしてさらに、岩波文庫の表紙の言葉を借りれば「営利の追求を敵視するピューリタニズムの経済倫理が、実は近代資本主義の生誕に大きく貢献したという歴史の逆説を究明」した、マックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(1905)をあげる。ヴェーバーは、プロテスタンティ

ズムと資本主義の結びつきについて論じ、資本主義の精神がクルーソーの孤島における生活のうちに現れているとしている。(ヴェーバー:355)

第2に、クルーソーを経済人ととらえる読み方の他に、クルーソーを宗教人ととらえるという読み方も従来からなされてきた。17世紀において非国教徒のプロテスタントの間で盛んに書かれたものとして、spiritual autobiography「精神の自叙伝」があった。これは自分の魂の遍歴を書き綴ったものであり、disobedience「神の意志に従わない」、punishment「神によって罰せられる」、repentance「悔い改める」、deliverance「神に許される」という一連のパターンに基づくものであるが、『ロビンソン・クルーソー』はまさしくこのパターンに則っている。

クルーソーは父親に反抗し、その忠告を無視する。それが彼の苦難の始まりとなる。自分の父親を表す際には大文字が用いられことに加え、当時は現在の固有名詞のように普通名詞を大文字で始めることがあったこともあり、父はFatherという表記になるが、大文字のFatherは神を表すことから、父親と神が重なってくる。つまり、父に対する反抗は、神に対する反抗でもあった。

「父の忠告に背いたことが、いわば私の原罪だ」とクルーソー自身も言っている通り、神なる父に反抗することが、彼にとってのoriginal sinであった。結局、クルーソーは悔い改め、父親がアドバイスしてくれた中産階級の生活に立ち戻ろうとし、孤島においてそれを実践していくことになる。

『ロビンソン・クルーソー』という小説が、文学とは違ったさまざまな学問領域から、さまざまな観点で注目されてきたということを理解したい。

11. 本当にリアリズム?

『ロビンソン・クルーソー』というと、「リアリズム」という評価が常についてまわる。一方で、この小説のリアリズムには、細かい点では欠陥があると指摘する批評家も多い。

確かに、デフォーが編集した版本には、大きな間違い・矛盾が散見される。たとえば、難破船まで泳いで行くために服を脱ぎ捨てたはずなのに、直後、ポケットにビスケットを詰め込む場面がある。すぐにその後で、つじつまを合わせるように「船まで泳いでくるのに、私はズボン(それもせいぜいリネン製の半ズボンだったが)とストッキングを履いたままだったのだ」とつけ加える。さらに、インクがなくなりそうなので日記をつけるのを諦めたはずなのに、27年後、インクは豊富にあったり、塩がなくて

苦勞していたはずなのに、フライデーに塩漬け肉の食べ方を教える際には塩が問題なくあったり、檻に入れていた子ヤギはオスであったはずだが、クルーソーが繁殖させることを思いついた時、メスへと変わったりと、いくつも指摘できる。

では、そもそもリアリズムとは一体、どういう書き方のことなのか。私たちは漠然と、リアリズムというのは、現実をそのまま写しとるものと考えているが、これらの例は明らかにそれに反しているといえるだろう。

ここでリアリズムというものについて考えてみる。確認したいのは、リアリズムとは現実をそのまま写しとるのではなく、現実をリアルだと感じられるように描くことである、という点である。物事をありのままに描いても、私たちはそれをリアルだとは感じられないということについて、記憶色の例などをあげながら、学生たちに理解させたい。

先の例はどれも矛盾といって良いものであるが、各場面をリアルに描き出す役割をはたしていることがわかる。日記を書き続けていけばインクはなくなるはずだし、塩も無限にあるはずがない。逆にいうと、当該の場面において役割が果たされているからこそ、読者は矛盾を意識させられることがないといえる。

不寛容社会といわれる現代の日本であるが、矛盾を矛盾として簡単に排除してしまうのではなく、そこを考える端緒としていくことの重要性、おもしろさを学生たちに伝えたい。

12. 本当に合理的？

大塚久雄の主張の根底にあるのは、クルーソーの思考や行動が合理的であるという前提である。しかし、クルーソーは本当に合理的な人物なのだろうか。テキストの抜粋部分の解説でも説明したように、合理性がみられることは確かであるが、クルーソーは常に合理的だといえるのか。『ロビンソン・クルーソー』をきちんと読んでいくと、決してそうではないことがわかってくる。

たとえば、クルーソーはほとんどなにも持ち帰るものがないことがわかっているにもかかわらず、難破船から物品の搬出活動を執拗に繰り返す。銃も身につけず難破船へと泳いで行くというのは、非常に危険を伴う作業である。また、泳ぐという行為は体力を奪い、注意力を低下させるものでもある。合理的な人間なら、決してこのようなことはしないだろう。

また、ある時クルーソーはカヌーを製作し、島を

脱出することを思いつく。そして、森の中で木を切り倒し、体力と注意力を奪うカヌー作りに没頭する。そして3ヶ月近くかけ完成して始めて、人手がないなか、カヌーを海まで運ぶ手段がないことに気づく。さらにそれに懲りず、今度はより海に近い場所で、そしてより小さな第2のカヌー製作に約2年を費やし完成させるが、今度は小さすぎて、海を渡って40マイル以上も向こうにある大陸に上陸するのは無理だと気づく。難破船の場合と同様、決して合理的な思考や行動がなされているとはいえない。

これらのクルーソーの行動は、衝動的、無意味、過剰といえるもので、労働自体が目的化してしまっており、自分の生命を危険に晒すものですらある。しかしだからこそ、100パーセント合理的ではない、クルーソーの人間らしさ、人間臭さが現れている部分だといえる。クルーソーは、決してどこから見ても合理的な人間であるわけではない。合理的な面と非合理的な面の両方をもつ、ごく普通の人間なのである。それが、クルーソーという人物が読者にリアルに感じられる一つの理由であろう。

このようにみえてくると、大塚は『ロビンソン・クルーソー』から自分の主張に都合の良い箇所をピックアップしていることがわかる。第二次世界大戦後、日本を脱封建化・近代化するという大義名分のなか、イギリスを近代化のモデルとしていた大塚は、意識的、無意識的に自分の主張を補強する要素をこの小説のなかに追い求めたといえる。

ここで学生たちと考えたいのは、レポート・論文を執筆する際の基本的な姿勢についてである。ここでは以下のような話をする。

最初に書きたいと思っていたことが、最後にそのまま書いている時には、都合の良い情報だけを集めてはいなかったか、あるいは、自分の論にとって都合の良い実験・観察方法を行ってはいなかったか、と疑ってみる必要がある。最初に自分の論を立てる際、その論を否定するような、その論に見直しを迫るような要素をこそ、時間と手間をかけて見つける努力をしなければならない。そのようにして論を練り直すことで、論は厚みをなし、読者を納得させられる内容をもつものを完成させることができる。

学生たちに、研究というものに取り組む姿勢を、早い段階から具体的な例をもって理解させることは重要であろう。それは研究に限らず、物事の考え方を身につけるということでもある。

13. 『ロビンソン・クルーソー』を今ならどう読むべきか？

『ロビンソン・クルーソー』において、フライデーは食人種と設定されている。なぜそのような設定がなされているのか、ここではその点について考えてみたい。

クルーソーの島は、絶海の孤島というわけではなく、丘に登ると陸地が見えるところにあり、しばしば食人種である先住民がカヌーでやってくる。そしてフライデーもその先住民の1人であった。ヨーロッパにおいては、カリブ海はコロンブスの日記以来、食人種の海と認識されていた。コロンブスは裸の原住民を見た際、「この男は人を食うカリブ族の一人に違いない」と日記に記し、以前からヨーロッパにあった食人種の伝説に具体的な形を与えた。ここではまず、このコロンブスの日記の問題点について学生たちと考えたい。

コロンブスは、顔に墨を塗り、体中に様々な色を塗り付け、頭髪を長く伸ばして、後ろで束ね、鸚鵡の羽根で編んだもので留めていた裸の先住民の姿を目にし、その野蛮な姿から、ほとんどそれのみを根拠に、即座に食人種であると断定する。(コロンブス 1977: 204) ひょっとすると、コロンブスにとって、先住民は食人種のような野蛮人でなければならなかったのではないか。

コロンブスというと、漠然と冒険家のようにとらえがちであるが、彼の行為は経済的なものでもあったことを忘れてはいけない。彼はスペイン王室から、発見地の総督職、世襲提督の地位、発見地から上がる収益の10分の1をもらう確約を得ていた。マルコ・ポーロの『東方見聞録』にある黄金の国ジパングに魅了されていた彼の目的は黄金であった。黄金の採掘には奴隷化した原住民を当て、その後はヨーロッパに連れ帰り、さらに奴隷として使うということも当初から計画されていた。

コロンブスの日記には「彼らはいい身体つきをしており、見栄えもよく均整がとれている。彼らは素晴らしい奴隷になるだろう。50人の男達と共に、私は彼らすべてを征服し、思うままに何でもさせることができた」という記述があるが、ここには原住民を奴隷化することへの戸惑いは全くない。1度目の航海を終えたコロンブスは、次の航海の目標を「国王たちが必要とするだけのありったけの黄金、彼らが欲しがらざるだけのありったけの奴隷を連れてくるつもりだ」と述べている。

食人種という定義づけは、意識的か無意識的かは

別として、コロンブスの目的達成に大きな前提となっていたことがわかるだろう。ちなみに、コロンブスは計3回、新大陸へと航海しているが、略奪後、「新大陸」へのコロンブスの上陸時に約800万人いたネイティヴ・アメリカンの人口は、1496年の末までにその3分の1までに減ったとされている。クルーソー自身も15世紀から17世紀にかけてスペインが新大陸において行った大量虐殺について、嫌悪感を語っている箇所がある。(『ロビンソン・クルーソー』上: 232)

社会の教科書でほとんど説明されることのない、非西欧世界に対する西欧世界の振る舞いについて、驚く学生も多いことだろう。

14. フライデーは、召使、奴隷？ 仲間、友人？

次に、クルーソーによるフライデーの描写をみてる。クルーソーは、縮れていない真っ直ぐな頭髪、広く高い額、黒くない肌の色、ぺちゃんこではない鼻、薄い唇といった特徴をあげ、アフリカ系との対比でフライデーを描写する。クルーソーにとって食人種は恐怖の存在であったが、フライデーについては「西欧人のような優しさ、柔和さがその顔立ちにみなぎっていた」と好印象を抱く。ここにあるのは、アフリカ系の人々を否定されるべきものとして排除する態度である。

食人種に食べられそうになっていたフライデーは、入り江を泳いで渡ってくる。そして、フライデーを追ってきた食人種の1人をクルーソーが射殺すると、フライデーはクルーソーの前にひざまずく。フライデーは自らクルーソーの側に、文明の側にやってくるのである。上記のクルーソーによるフライデーに対する好意的な描写は、このことと密接に結びついているといえるだろう。

その後、フライデーは、クルーソーの元で急激にヨーロッパ化を遂げる。それは「野蛮」から「文明」という表現で要約できる。フライデーは、人肉ではなくヤギの肉やパンを食べ、それまでは裸であったのが衣服を身に着けるようになり、英語を話し、銃の使い方までも習得し、実際にそれで同族の食人種を殺す。そして3年も経たないうちに、クルーソー以上に信心深いキリスト教徒へと変貌を遂げる。この変貌の土台となっているのは、フライデーの自発性である。彼はクルーソーに変えられるわけではない。自ら変わるのである。

ここで学生たちと考えたいのは、自発と強制ということについてである。確かに、クルーソーはフライデーに何かを強制しているようにはみえない。し

かし、私たち読者は想像力を働かせ、フライデーの立場に自らの身を置いてみる必要がある。フライデーがクルーソーに出会った時、彼は生命の危機にさらされていた。そこに銃という圧倒的な力を持つクルーソーが現れ、敵を一瞬で殲滅した。新たな生命の危機のなか、フライデーが自発的にクルーソーに従属する立場に自らの身を置くのは、当然というより必然ではないのか。実際、クルーソーも蛮人を奴隷にすることを考えていたことも、ここで思い出す必要があるだろう。

戦争のような極限状態における強制された自発性の例、たとえば、いわゆる「従軍慰安婦」や沖縄の「集団自決」から、学生たちの身近にあるファッションの例などもあげながら、私たちの生活、人生に広くみられる強制された自発性について、学生たちと考えてみたいところである。

クルーソーとフライデーの関係には、植民者としてのクルーソーと被征服民としてのフライデーという構図がみえる。先住民たちが自発的に植民者に服従する、という征服民にとって都合の良い状況が、1つのエピソードとして具体化されているともいえるだろう。

孤島における序列についても、気になる点がある。クルーソーは、フライデーを救った後、フライデーの父親とスペイン人の船長を食人種から救い出す。4人での生活において、フライデーとその父親がさまざまな労働を請け負い、スペイン人にはそれを監督するという役割が与えられ、ここに、クルーソー、スペイン人、フライデー親子という序列ができあがる。クルーソーとスペイン人の上下関係については、助けた者と助けられた者という前提が当然あるが、ここには、スペインの無敵艦隊を打ち破ることを皮切りにヨーロッパの覇権を手中に収めつつあったイギリス、という大きな時代の流れも反映されているだろう。

しかし、なぜ当然のようにスペイン人はフライデー親子を監督する立場となるのか。両者とも、クルーソーに助けられたという点において同じ立場であるはずである。私たち読者のほとんどは、この点について疑問を抱くことはないかもしれないが、そこにこそ問題がある。私たちのなかに人種的な偏見があるからこそ、問題点は問題点として浮かび上がって来ないといえる。

アジア人であるはずの私たちのなかに西欧中心主義が根深く存在していることについて、西洋の記述に偏った世界史の教科書なども具体例としてあげながら、学生たちと考える端緒としたい。

15. 最後のエピソードの意義はなんだろう？

イギリスに帰還したクルーソーは、その10年後、自分が28年間生活した島を再び訪れようとするが、なかなか島を見つけることができない。そこで、クルーソーは自分の地理的認識が間違っていたことに気づくことになる。すなわち、フライデーがカリブ族ではない可能性が最後に示唆されていることになる。デフォーはどのようにこのようなエピソードを最後に付け加えているのか、それをここでは学生たちに問いかけてみる。

スペインが新大陸において行った大量虐殺に対するデフォーの嫌悪感については先にふれたが、これまで小説を見てきてわかるように、デフォーのなかに非ヨーロッパ系、アフリカ系に対する差別意識があることは間違いない。そしてそれは、圧倒的に白人中心主義が支配していた、当時のヨーロッパにおいては仕方のないことであるとはいえる。孤島における主従関係を決定づける「カリブ族としてのフライデー」という規定を大きく揺るがすこのエピソードは、どのような意義をもつのか。ひょっとするとここには、名付けるということに含まれる暴力性とその危険性に対する、デフォーの無意識的な拒絶が現れているのかもしれない。当時の状況において、デフォーがそれを明確に意識していたということは、おそらくありえないだろう。ヨーロッパ中心主義に対する疑念がはっきりと顕在化してくるのは、20世紀も終わり近くになってからである。あくまでも無意識的な拒絶としか言うことはできないが、このエピソードがあることの意義はそこにあるのではないか。

優れた作家が、場所と時代を突き抜けて予言的な内容を提示する場合があるということについては、次のスウィフトのところでもさらに実例をみることになる。

16. マイノリティってなに？

これまで見てきたように、『ロビンソン・クルーソー』についてはさまざまな読み方がなされてきた。無人島におけるサバイバル物語として読むという、おそらく最も一般的な読み方。経済的寓話、あるいは宗教的寓話として読むという従来からの読み方。そして植民地支配の歴史と重なる物語として読むという新しい読み方などである。

最後の読み方においては、西欧による非西欧の侵略・支配の歴史において繰り返されてきた方法を、クルーソーが孤島において実践している点にも注目

する。これまでの歴史において、植民者が他者としての被征服民を二分するという方法がとられることが多々あった。具体的には、被征服民を自分たちに忠実な下僕としての高貴な野蛮人と自分たちに抵抗する危険性をもった獷猛な野蛮人に分け、前者と自らに近いものとして取り込むことで被征服民のコミュニティを分裂させ、支配を容易にするという方法である。

確かに、目を凝らしてみると、この『ロビンソン・クルーソー』には、西欧による非西欧の侵略・支配の歴史が透けてみえてくる。

ここで学生たちに、今であれば少なくとも一度は通過すべき読み方の1つとして伝えたいのは、マイノリティの立場から物語を読み直すという方法である。マイノリティというと「少数者」ととらえがちだが、「あるコミュニティにおいて、支配力や権力を与えられず、アンフェアな扱いを受けている集団」という意味もあることをまずは説明する。たとえば、日本において女性はマイノリティといえるだろう。マイノリティに属している登場人物の立場から物語を再読することによって、従来とは全く違ったとらえ方が可能となる場合がある。特に、古典として評価が定まっているような作品を扱う場合、重要な新機軸を打ち出すことがありうる。シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』などはその筆頭であろう。

孤児であり、財産ももたず、美しくもないと設定されている主人公ジェインが、家庭教師として住み込んだ家の主人であるロチェスターと結ばれるまでを描いたこの作品において、ロチェスターはジャマイカ出身で精神を病んでいる妻バーサを屋根裏部屋に監禁し、それを隠したままジェインと結婚しようとするが、直前でそれが露見し、結婚は取りやめとなる。その後、バーサは屋敷の火事によって死亡。火事によって視力と片腕を失ったロチェスターはジェインと結婚する。ジェインというヒロインを通して、女性の自立した生き方を示すとされる物語において、もう1人の女性の登場人物であるバーサは、排除されるべき存在として描かれる。ある差別が克服されていく過程において、その差別の構造が反復されてしまうというパラドックスがここにはある。

女性で、ジャマイカ人で、狂人であるバーサは、三重の意味でマイノリティであるといえるが、この物語をバーサの視点から見るとどうなるか。ジーン・リースの『サルガッソーの青い海』を例としてあげながら、男性中心主義、ヨーロッパ中心主義、健全者中心主義というものがくっきりと具体的な形

をとって作品の背後に立ち現れてくることを確認したい。このように、マイノリティの立場から読み返すというやり方は、作者自身も明確には意識化していない態度をあぶり出す可能性ももっている。

また、このようにマイノリティの立場に立つというやり方が有効なのは、物語を読む場合に限ることではない。日常生活においても、何らかの形で排除されている人の立場を具体的に想像することで、物事が全く違った様相でみえてくることがある。きっと学生たちにもこれまでの経験のなかで何か思い当たることがあるはずで、具体的な事例をこれまでの経験から聞いてみたい。ある物・ある人を取り囲む状況を想像力を使って具体的に把握することの意義について再確認しながら、『ロビンソン・クルーソー』の締めくくりとする。

参考文献

- 阿部公彦『英語文章読本』(研究社, 2010)
 阿部公彦『英語的思考を読む』(研究社, 2014)
 阿部公彦『詩的思考のめざめ: 心と言葉にほんとうは起きていること』(東京大学出版会, 2014)
 ウイドウソン, H. G.『文体論から文学へ: 英語教育の方法』田中英史, 田口孝夫訳(彩流社, 1989)
 ウイドウソン, H. G.『文学と教育: 詩を体験する』梅沢時子, 野呂浩, 小田朗美訳(英宝社, 2005)
 ヴェーバー, マックス『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(岩波書店, 1989)
 白田昭『ピープス氏の秘められた日記』(岩波書店, 1982)
 岡田伸夫, 南出康世, 梅咲敦子編『英語研究と英語教育: ことばの研究を教育に活かす』(大修館書店, 2010)
 川口喬一『イギリス小説入門』(研究社, 1989)
 菊池繁夫, 上利政彦編『英語文学テキストの語学的研究法』(九州大学出版会, 2016)
 クック, ガイ『英語教育と「訳」の効用』(研究社, 2012)
 コロンブス, クリストファー『コロンブス航海誌』(岩波文庫, 1977)
 コロンブス, クリストファー『全航海の報告』(岩波文庫, 2011)
 斎藤兆史編『言語と文学』(朝倉書店, 2009)
 サザーランド, ジョン『ジェイン・エアは幸せになれるか?』(みすず書房, 1998)
 塩谷清人『ダニエル・デフォーの世界』(世界思想社, 2011)
 大学英語教育学会文学研究会編『英語教育のための

- 文学案内事典』(彩流社, 2000)
- 高橋和子『日本の英語教育における文学教材の可能性』(ひつじ書房, 2015)
- 高橋英光『言葉のしくみ: 認知言語学のはなし』(北海道大学出版会, 2010)
- 田中宏幸, 坂口京子編『文学の授業づくりハンドブック: 授業実践史をふまえて』(溪水社, 2010)
- デフォー, ダニエル『ロビンソン・クルーソー』(上・下)(岩波, 1967)
- 浜井祐三子『イギリスにおけるマイノリティの表象: 「人種」・多文化主義とメディア』(三元社, 2004)
- 廣野由美子『一人称小説とは何か: 異界の「私」の物語』(ミネルヴァ書房, 2011)
- マッカーシー, マイケル『語学教師のための談話分析』安藤貞雄, 加藤克美訳(大修館書店, 1995)
- マルクス, カール『資本論』(一~八)(岩波書店, 1969)
- 真野泰『英語のしくみと訳しかた』(研究社, 2010)
- 三森ゆりか『外国語を身につけるための日本語レッスン』(白水社, 2003)
- 三森ゆりか『外国語で発想するための日本語レッスン』(白水社, 2006)
- 村上春樹, 柴田元幸『翻訳夜話』(文藝春秋, 2000)
- 吉村俊子他編『文学教材実践ハンドブック: 英語教育を活性化する』(英宝社, 2013)
- Biggs, John and Catherine Tang, *Teaching for Quality Learning at University: What the Student Does* (New York: Open University Press, 2011)
- Booth, Wayne C., *The Rhetoric of Fiction* (Chicago: Chicago University Press, 1983)
- Carter, Ronald and John McRae, *Language, Literature and the Learner: Creative Classroom Practice* (New York: Pearson Education, 1996).
- Collie, Joanne and Stephen Slater, *Literature in the Language Classroom: a Resource Book of Ideas and Activities* (New York: Cambridge University Press, 1987)
- Hall, Geoff, *Literature in Language Education* (New York: Macmillan 2015).
- Richetti, John, *The English Novel in History, 1700-1780* (New York: Routledge, 1999)
- Simpson, Paul, *Language through Literature: an Introduction* (New York: Routledge, 1997)
- Stanzel, F. K., *A Theory of Narrative* (Cambridge: Cambridge University Press, 1986)